

26

李東垣の陰火論に対する研究

方正均

韓国 尙志大学校韓医科大学原典医史学教室

李東垣は字を明之といい、晩年は東垣老人と号した。彼は金元兩代にわたる医家で、1180年に生まれ、1251年に没した。東垣は易水学派の創始者たる張元素から医学を学び、元素の蔵府弁証説を継承している。とりわけ脾胃の内傷病と関連する部分で卓越した識見を示した。李東垣の中心的思想が集約されているのは、『東垣十書』の中で『内外傷弁惑論』『脾胃論』『蘭室秘蔵』であるが、彼が生前に書いたのが確実なのは『内外傷弁惑論』(丁未、1247)と『脾胃論』(己酉、1249)である。

東垣が医学に与えた貢献を医史学面から整理すると、以下の二つが挙げられる。第一は内傷病の意味を深化させ、発展させたこと。第二は生理と病理の概念において、元氣と陰火の理論を提起したことである。

すなわち陰火が発生する病機を説明する時、東垣が強調したのは脾胃の虚損だった。彼は陰火が発生する重要な病機として、脾胃の虚損に言及している。つまり東垣は陰火の発生原因を外因ではなく、内因と認識していたのである。ただし彼が提示している陰火は、韓国韓医学が『内経』以来認識していた内因論と、すこし差異が見られる。すなわち一般的にいう内因とは、一切の正氣が内で虚したことが原因で発生することを示唆するが、東垣が強調した内傷病は脾胃の虚損による病因を根幹としている。

さらに一般的にいう心火と、東垣が提示した心火の意味を対比してみたい。一般的な心火とは七情の傷で氣機が鬱結して発生することなので、主に心火を清す治法が適用される。他方、東垣が提示した心火とは、元氣の損傷により発生する。すなわち脾胃の不調和で心が凝滯されると、心の凝滯で発生する七情の不安が脾胃の機能を再び損耗させてしまい、陰火が熾盛になるのである。

他方、東垣は陰火の病機として陰虚を指摘する。同時にそれは相火とも関連があるという。すなわち彼がいう相火とは、脾胃の機能喪失で発生する熱症の表現といえよう。また脾胃の生理機能が喪失され、陰精がきちんと生成されて輸布されないと、陰虚の状態を発生する。この陰虚は病機の一過程に過ぎず、陰火の発生を決定する要素ではない。

陰火のため発生した熱症を治療する目的で、東垣は治療法も提示している。その中でも代表的なのは甘温除熱法で、この治法の代表的処方が補中益氣湯である。そして甘温による除熱法を適用できる熱症は、主に湿熱と関係がある。つまり脾の運化する生理機能と転輸する生理機能が失われてしまうと、津液が全身に輸布されずに停滯して、湿という病理的産物が発生する。その湿が鬱滯すると必然的に湿熱になる。これが陰火のために発生する熱症である。このような熱症に適用される補中益氣湯は、脾氣を補って升挙させ、陰精を運化して輸布することで、陰火のために発生した熱症を治療するのである。

一方、陽氣を升挙して散火する治法は、甘温による除熱法の適応症に比べて、時熱症の程度が深刻な時に適用される。すなわち脾胃が虚弱したため清氣を昇らせ、濁氣を降ろす生理機能を喪失してしまい、陽氣が宣発されずに鬱閉したための熱症に適用される。この時に発生する熱症が、東垣の提起した困熱に当たるのである。